

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	林 敏 潔
<p>主 論 文 題 名： 日本における魯迅文学の源流と伝承</p> <p style="text-align: center;">—その“師弟” 関係をめぐる研究—</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本稿は日本語学習体験と外国文学翻訳活動を有する魯迅が、日本および日本語を媒介として“師弟”の縁を結んだ人々に関する比較文学的研究である。</p> <p>魯迅は若き日に日本に留学し、その日本留学中に、人生における一大転換点に遭遇し、しかもその一大転換を成し遂げている。日本における留学生活は、魯迅の視野を開き、魯迅の思索に強い啓示を与えた。魯迅は、これを思想的に昇華し、精神的に故国の人々を治癒するという決意を固めたのである。</p> <p>日本留学は、魯迅にその後の執筆、翻訳の基礎となる外国語能力を習得させただけでなく、人生における良師良友たる藤野厳九郎教授らと出会う機会を与えた。異国他郷にあって受けた藤野先生の親身の指導は、勉学への励みとなったばかりでなく、精神的支えとなった。知者同士の友情としての師弟の情誼が、苦しい道を進まんとする魯迅に力を与えたのである。別れ際に藤野厳九郎が与えた 1 枚の肖像写真は魯迅の宝となり、さらに読む人に忘れ難き印象を与える代表作「藤野先生」を執筆させた。同作で魯迅は自らの魂の歷程を語り、恩師に対する篤い感謝の思いを述べている。</p> <p>このような言い方も可能であろう——もしも日本に留学しなければ、魯迅はまったく異なる道を歩んでいたかもしれない。言い換えれば、日本留学という経験が、今日の魯迅の豊かなイメージを作り出したのである。留学から帰った魯迅は筆を武器として、次々と代表作を書き上げた。それは一見すると質朴な言語であるのだが、実はそのうちには人の心を突き動かす力を含み、一言々々がすべて混沌たる世事に対する鋭い批判となっており、これを読み終えた人を深い省察へと導くのである。さらに魯迅の文章は現実批判に留まることなく、社会の発展に対する予見に富む点も高く評価される。魯迅の気骨があり力強い文筆は、世界の学者・研究者の関心と敬意を集めているのである。</p> <p>魯迅は日本留学により、日本と深い縁で固く結ばれており、日本留学体験は魯迅文学の源流であり、それは大いに日本の学者・研究者たちの注目を集めてきた。日本の主流メディアも十分にその使命を果たし、魯迅および魯迅関係ニュースに注目し、機会あるごとに国内外に魯迅に関する報道を行っている。そして中日両国は魯迅を懸け橋として、両国間の交流と理解に常に努めている。日本において魯迅をめぐる形成されてきたイメージは、将来も日本人に対し、日本と中国・東アジアとの関わりに対し巨大な影響力を行</p>			

使し続けることであろう。

このように魯迅文学は日本と深い縁で結ばれている。本稿は先行研究に学びつつ、「日本における魯迅文学の源流と伝承——魯迅をめぐる師弟関係の研究——」という視点から、日本および日本語を媒介として“師弟”の縁を結んだ魯迅とその周辺の人々との影響関係を以下のように論じた。

第一章では松本亀次郎の生涯をたどりつつ、彼と魯迅との関係に焦点を当てて、魯迅の日本留学期の経歴および思想形成の背景を考察した。公立学校教職員の恩給受給の資格を満たした松本は、それまでの順調な教育人生とは異なる道を選び、日本語教室の内外で献身的に中国人留学生教育を実践した。苦心惨憺しつつ勤勉誠実に、1945年に逝去するまでの40年近い歳月をこの教育事業に捧げた。誠実な人柄にして、厳格な学風をもつ松本は、厩大な数の留学生から絶対的な信頼と敬意を寄せられた。宏文学院では、松本亀次郎と魯迅たち留学生との関係は一般の教師と学生関係を越えており、両者の間では知性溢れる交流が盛んに行われていた。これにより建設的な相互影響関係が生み出されたのである。ある意味で、教育と研究が合一した理想的師弟関係が宏文学院では実現されていたのであり、松本と魯迅との関係はその典型的な一例であったと言える。松本亀次郎は魯迅に彼が日本と縁を結ぶに不可欠な日本語を教え、その後の魯迅の文豪兼翻訳家兼学者としての大活躍を見守り続けた。松本は魯迅にとって最初の日本の“師”であったと言えよう。日本留学当初における松本亀次郎との出会いは、魯迅文学の源流の一つなのである。

松本亀次郎が最初に日本語を教えた中国人留学生である魯迅のことを生涯忘れなかったように、魯迅もまた師弟間で日本語と中国語との文法の異同を論じた日本語教室の一部始終を忘れることはなかったに違いない。魯迅の厳格な翻訳態度の原点は、宏文学院の松本亀次郎の日本語教室にあるのかもしれない。もしも松本亀次郎がいなければ、魯迅や秋瑾、周恩来をも含めた中国人留日学生の就学の道はさらに困難なものとなっていたであろう。さらに言えばこれらの日本留学組がその後に中国発展のために大いに貢献したことの背景には、松本の影響があったと言っても過言ではない。

第二章では、留学時代の魯迅が、ロシア人作家アンドレイエフの「謾」と「黙」の2作品を翻訳した目的および両作品と魯迅の最初の小説である「狂人日記」との影響関係を明らかにした。日本留学時代に文学による中国人の国民性改造に力を尽くしていた魯迅は、日本文学ばかりか、広く外国文学作品に学ぼうとしており、世界文学短篇集『域外小説集』刊行はその成果であった。当時、欧米・日本で流行していたアンドレイエフ作品の中から、特に「謾」、 「黙」を選んで翻訳したのは、魯迅が「誠」と「愛」の欠如を中国人の国民性の最大の欠点と見なしており、翻訳を通じて中国人に自らの欠点を自覚させようとしたためであったと考えられる。アンドレイエフの「謾」と「黙」は、当時のロシア社会において、人と人との間を隔てている精神的な厚い障壁、人々の心の中に蛇のようにとぐろを巻いている「虚偽」と「沈黙」とを抉り出した。それはまさに「誠」と「愛」が欠如している中国の国民性の宿痾を療治するための格好の文学作品である、と魯迅は考えたのである。

1918年の魯迅の創作である「狂人日記」では異常で狂気を帯びた心理が活写されており、中国人におけ

る「誠」と「愛」の欠如が鋭く描かれている。「狂人日記」とはアンドレイエフが直面していた「謾」と「黙」が遍在する世界であった。「狂人日記」にはアンドレイエフ作品からの明らかな影響を見出せるのであり、「謾」と「黙」の翻訳は「狂人日記」創作に先行する試みであったのだ。魯迅がアンドレイエフの「謾」と「黙」の翻訳に托した「誠」と「愛」への追求は、「狂人日記」のテーマと創作方法に緊密につながっているのである。

第三章では、まず、増田渉と魯迅が80年前に上海の魯迅宅での個人講義の教科書に使っていた直筆注釈版の『呐喊』『彷徨』に関する調査状況と研究意義を述べた。この増田渉旧蔵書の注釈メモの調査により、師としての魯迅が学生としての増田渉に寄せた大いなる愛情が明らかになったほか、魯迅文学の日本語訳の改善の可能性が示され、魯迅小説の難解な部分に対する新解釈ももたらされた。短篇「傷逝」は魯迅唯一の恋愛小説である。その脱稿の日は別の短篇小説「孤独者」完成の4日後とされているが、内容から見れば「傷逝」は「孤独者」の「前篇」であり、「孤独者」は「傷逝」の「続篇」と読める。「孤独者」と「傷逝」とは「lover」（これは筆者が増田渉旧蔵書の直筆注釈版『呐喊』の中から発見した注釈メモである）を喪失して孤独寂寞へと向かい、最終的に連続して死ぬ運命を辿る女性主人公・男性主人公たちを描くために魯迅が創作した2篇の連続小説なのである。このように主に増田渉注釈本『彷徨』における「lover」という魯迅自身による注釈を参照しながら、これまで謎とされてきた「孤独者」の主人公である魏連殳が「私に幾日かでも生きることを願った人」とは誰を指すのかという点、そして二つの小説がそれぞれ空白を残し、相互に空白を埋めあいながらある種の濃厚な継承呼応の関係を構成している点を論証した。また「lover」のほか、「孤独者」の主人公魏連殳の名前に隠された秘密、暗示的な比喩、両作品の日付に付された「畢」という文字の謎も解明した。本章ではさらに魯迅訳アルツィバーシェフ原作の長篇小説『労働者シェヴィリョフ』と「孤独者」との影響関係について考察し、劇場でピストルを乱射するシェヴィリョフの復讐と比較すると、魏連殳の復讐は遥かに穏健なものではあるが、絶望的復讐という情念において共通している点を指摘した。

多くの謎と空白を包み込んだ「傷逝」「孤独者」両作の解読の過程で、増田渉直筆注釈メモは、難解な部分を正しく翻訳あるいは解読するための導きの糸となるほか、魯迅小説をめぐる幾つかの重要な学術的問題に対して大いなる示唆を与えてくれ、魯迅研究の可能性を拡大し、魯迅作品の解読を深化させるのに有益なのである。

第四章は林芙美子の中国版ミニ「放浪記」とも言うべき杭州・蘇州旅行エッセイを分析し、彼女が独自の中国観を深めることによって、魯迅との篤い“師弟”関係を築くに至るプロセスおよびその内実を考察した。消夏旅行の予告としてのエッセイ「大陸へ」は林芙美子の中国への親近感と期待を語っており、「秋の杭州と蘇州」は1930年の中国放浪体験に基づき、当地の美しい景色、風習、産物のほか、「最悪な」馬桶など個人的体験を述べるいっぽうで、郁達夫、魯迅等々文人との交流を記録している。また林は当時の北伐戦争後の都市の社会状況と、国民党による共産党弾圧の政治状況を観察し、近代化の過程に存在す

る貧困に対する切ない共感を表明した。魯迅は日本人の知人を多く持っていたが、林芙美子との間に育まれた交流は、満州事変から中日戦争までの中日両国関係が最悪の時代にあつて、相互に深い敬愛と細やかな友愛とを抱き合う、稀に見る国境を越えた文学者同士の友情をもたらした。各種の肉体労働体験を持ち、中国の庶民の暮らしの中にも入っていき、それを題材として優れた小説や旅行記を執筆する林芙美子を、魯迅は深く信頼し激励した。そして彼女も魯迅を師と慕い、魯迅の名作を「詩を読むやうに」愛読していたのである。

林芙美子は1932年に再び魯迅を訪ねて交友を深めており、その4年後の魯迅逝去の際には悲しみに溢れる追悼文を書いている。同じ東洋人として魯迅を誇りに思いつつ書かれた「後世に残る作家」「私達の幸福であり、大きな名誉」という敬愛の言葉の数々は、詩人にして小説家であり、上海での出会いという縁により魯迅の“弟子”となった林芙美子にして初めて言い得たものである。それは当時の日本の多くの魯迅文学愛読者の気持を代弁するものでもあったのであろう。

第五章では孤独な日本留学を通じて魯迅を深く理解するにいたった蕭紅、そして彼女と魯迅との師弟関係を生き生きと描く、近年製作の蕭紅伝記映画『蕭紅』と『黄金時代』の2作を中心に考察し、一人で東京暮らしを送っていた蕭紅の魯迅が亡くなった際の心情を解明し、蕭紅が敢えて書いた「黄金時代」という言葉の深層の意味を追究した。また、最近の蕭紅ブームの火つけ役となったこの映画2作における魯迅像とその素材となった蕭紅の作品『魯迅先生の思い出』などを取り上げながら、日本傀儡政権下にある満州より脱出した蕭紅と魯迅の間の感動的な深い師弟愛、および蕭紅による魯迅精神の伝承を考察した。蕭紅の『魯迅先生の思い出』はあふれんばかりの誠実さと素直な思いから綴られたという特徴を備えているほか、まさに蕭紅特有の細心の観察眼により、魯迅の多くの靈感に満ちた暮らしの細部を鋭敏に捉え、魯迅の個性、感情、そして人情味あふれる魯迅の思想と人格を表現している点でも注目に値する。また今日より約80年前に蕭紅がその短い生涯の末期に創作した無言劇『民族魂』についても考察を行い、蕭紅は劇作家としても、魯迅精神の伝承に力を尽くしていた点を明らかにした。

もしも魯迅による熱心な育成がなければ、蕭紅が現代文学史においてこれほどまでに高い地位におかれることはなかった。蕭紅の「作家たちの創作の出発点は人類の愚かさに向かいあうこと」という宣言は、彼女が魯迅精神を良く学び、魯迅の創作法の精髓を十分に吸収していたことを示すものと言えよう。蕭紅文学における人の存在意義と女性の運命に対する描写、「生」と「死」、「誠」と「愛」、「貧困」と「道徳」などのテーマに関する描写と探求は魯迅の系譜を継ぐ流れを汲むものなのである。蕭紅が魯迅精神を継承し、魯迅精神は蕭紅という後継者を得て伝承されてきたと言えよう。そして『蕭紅』『黄金時代』という2作の映画は、そのような伝承の現在を支える視聴覚メディアなのである。『黄金時代』と『蕭紅』の興行成績は明暗を分けたとはいえ、両作ともに蕭紅の人生と文学のみならず、魯迅との師弟関係について現代人に深い思索を促すという貢献を果たしたのである。

留学生の魯迅が東京の下宿で『朝日新聞』連載の夏目漱石の小説を毎日読んでいたのは、今から110年

前のことである。そして帰国後も魯迅は北京で『読売新聞』を講読している。なお魯迅をめぐる日本最初の新聞報道は1922年7月14日の『読売新聞』であり、1934年1月には『朝日新聞』が魯迅の日本語エッセイを掲載している。第六章は、このように100年を優に越す魯迅報道の歴史を有する日本の新聞を通じて、魯迅文学の伝承状況を第1期1922～1945年、第2期1946～1975年、第3期1976～1995年、第4期1996～2015年の4期に分けて考察し、新聞メディアが以下のような広大な魯迅文学伝承の展開を主導していたことを明らかにした。①1920年代に始まった魯迅に関する報道が、1930年代から1945年8月までの間は、険悪化する中日関係の中で日本人に同時代中国理解のための貴重な情報源であったこと。②戦後アメリカ占領下でも魯迅関係記事は細々とではあるが維持され、1952年の日本独立回復後は、アメリカによる社会主義中国包囲網をくぐり抜けて、魯迅の文学作品の翻訳や魯迅戯曲化作品の上演、魯迅ゆかりの中国人訪日などに関するものを中心に魯迅関係記事が急増し、日中友好の機運を高めたこと。③文革終了後には日本の魯迅研究が最初のピーク時期を迎え、また中国人の日本留学が本格化し、日本人の中国訪問も急増していたことを受けて、中日両国の魯迅関係書の紹介や魯迅曾遊の地仙台や魯迅の故郷紹興などに関するものを中心に魯迅関係記事が増え続けたこと。④1990年代の中国の経済的発展に伴い中国人訪日客が急増するなど、より広く深く多様化した中日文化交流が展開され、中国人の日本理解の方法として魯迅の重要性がいっそう高まっていたこと。これらのことが、この時期の新聞報道から窺うことができる。

第六章までの魯迅文学の日本における伝承に関する研究は、主に魯迅の日本体験と魯迅作品をめぐる批評、研究、翻訳、作品の戯曲化を対象としてきたが、第七章では前章の方法を魯迅戯曲化作品受容史研究に応用し、日本における魯迅戯曲化作品上演状況を考察した。日本では魯迅逝去直後から魯迅戯曲化作品の翻訳やシナリオ化が始まっており、1939年8月には新劇『阿Q正伝』上演が実現しているのである。魯迅戯曲化作品の上演は、戦後はいよいよ盛んになって、独自の魯迅文学伝承史を形成してきたのである。特に魯迅戯曲化作品が魯迅小説の戯曲化に留まることなく、魯迅伝風の戯曲へと展開した点は興味深く、霜川遠志の演劇活動は戯曲『阿Q正伝』から、伝記劇『藤野先生——仙台の魯迅』へと展開し、その試みは石垣政裕ら劇団仙台小劇場による実証性の高い『遠い火』に継承された。この『遠い火』は魯迅生誕135周年記念などの機会に中国でも上演されている。井上ひさしの『シャンハイムーン』は、作家の魯迅に対する深い敬愛の思いとユーモアにあふれる作劇法により、商業演劇としても成功しており、日本人の魯迅に対する親近感を掻き立てている。日本における魯迅受容を考える際には、魯迅戯曲化作品上演史の研究は不可欠と言えよう。

中学・高校の国語教科書収録の魯迅作品は、ティーンエイジャーの生徒たちを対象とし、教室において教師より教えられるのである。学校の授業という場における、日本の中学生・高校生と魯迅との関係は、「魯迅をめぐる師弟関係の研究」をテーマとする本稿にとっては重要な研究課題の一つである。そこで、第八章では戦後日本の中学・高校国語教科書を通じて魯迅文学の伝承を考察するため、2008年刊行の『教科書掲載作品 小・中学校編』などの先行調査に加えて、筆者独自に、教科書研究センター附属教科書図書

館における中学・高校国語教科書の調査、および教科書出版社各社に対する最近4年間の新規中学・高校国語教科書出版状況に関するアンケート調査を行い、日本の中学・高校国語教科書における魯迅作品収録状況を研究し、以下の点を明らかにした。すなわちアメリカ軍占領下からの独立回復直後の1953年には中学国語教科書に、翌年には高校国語教科書に相継いで魯迅作品が採用され、国交正常化の1972年以後すべての中学国語教科書に「故郷」が採録されるなど、日本の中学・高校の生徒は国語教科書を通じて魯迅と“師弟関係”を結んできたことである。この伝承の歴史のさらなる解明のためには、魯迅作品を採録する教科書の設問、教師用教科書指導書の解説、中学生・高校生の感想文などをさらに収集し分析する必要がある。本章は筆者が今後新たに展開する研究プロジェクトの序説を兼ねてもいる。

以上のように日本留学を源流とする日本における魯迅をめぐる“師弟”関係および伝承は現在も続いており、それは21世紀に入って多分野の研究者や広範な一般市民による活潑な文化活動へと発展し、さらにマスコミ報道の助けを得て中日両国交流の基盤となっている点を論証した本稿は、魯迅文学の重層的な伝承・受容に関する新研究の試みである。

The experience of studying in Japan provides an opportunity of foundational training for Lu Xun to become a great writer and also serves as the genesis of the formation of a diverse image of Lu Xun as we know him today. The dissertation reveals the historical expansion of the image of Lu Xun, explores the “mentor-disciple” relationships surrounding Lu Xun and his literary legacy. In the 21th century, this legacy has been carried forward by scholars in multiple disciplines to a wide spectrum of general public. Moreover, it has become the foundation for Sino-Japan cultural exchange through media reports. This dissertation is an attempt to present a new, multilayered research on the reception and legacy of Lu Xun’s literary endeavor.

